



—第十五想—

葉蘭をご存じだろうか。お寿司屋さんでは「ぼらん」と呼んでいるかもしれない。今ではビニール製の殆どだが、かつては本物の葉蘭の葉が使われていた。ギザギザの山型に切られた葉蘭が、色とりどりのお寿司の中に入っていると、見た目にも美しいのはもちろん、種類の違う寿司同士の仕切役を果たし、米と米とがくつつくの遮るばかりでなく米の保存剂的役割も持っていた。かつては高根沢町の家でも、台所近くに葉蘭を植え、花見や運動会といった行事の弁当づくりには重宝がっていたのではないだろうか。

広辞苑によると、「ユリ科の多年草常緑草本。葉は長大な楕円形で柄も長い。葉は生花または料理の敷物とし果実を葉用とする。中国の原産で古くから庭園に栽培。根茎を利尿・強壯剤とする。」とある。

どういふ風の吹き回しか、突然、葉蘭を植えてみたくなった。家族で出かけるときや子ども達の弁当に、父親が颯爽と台所を飛び出し、葉蘭を取ってきてその効用を説明しながら作ってやったら尊敬に値するのではないかという、涙ぐましい密かな狙いもあったことは事実である。でもそれよりも、人間にとつて本当の豊かさとは何かを考える機会にしたいという願いのほうが大きかった。

湧水をふさぎ、川から生き物を追い出し、雑木山はなぎ倒し、星ぼしを視界から遮断して、私たちは文明を享受し便利を謳歌してきた。そして失ってしまった「水を魚を虫をカブトムシをクワガタを、そのほかの大切なものすべて」を、大金を払って買うのである。何でもお金に換算しなければ気が済まないこの社会の考え方は、自分にも消せないものとして染みついて、自分を十分知りつつも、何かおかしな気がして悲しいのである。

さて葉蘭であるが、探したけれども売っている店がなく、そんな話をしているうちに、健康福祉課のH君が友人から一株わけてもらってきてくれた。早速自宅の台所近くに（葉蘭は日陰の風通しの良いところが適している）植えようと場所を探していると、なんと、アジサイの陰に隠れていてわからなかったのだが、我が家にも葉蘭があったのである。忘れられ手入れもされていないためか

色褪せて弱々しくなつてはいたが、いま生きていけば百歳にならんとする祖父祖母の時代には、生活の一部として重宝がられ大切にされたのだろう。そしてそこには、貧しくとも人間の本当の暮らしがあつたにちがいないと思う。

葉蘭はじつに様々なことを私に教えてくれたのである。

町長 記

